

## よくわかる子どものこころ講座 その5 虐待を受けた子ども(2)

元診療科医師 松居ゑり子

### 【対応】

被虐待児に関わる大人がやるべきことは、虐待者を呪うことでも忘れさせることでもない。そんな記憶に勝手な真似をさせないことである。記憶自体は事実だから消すことはできないが、“過去の記憶”と“現在の怒りや情けなさや無力感”を切り離して、思い出にすることはできる。過去の呪縛から解放されれば虐待の世代間連鎖も防ぐことができるのではないだろうか。いつか被虐待という辛い体験が過去のものとなり、辛い体験の記憶に支配されない人生を歩んでいくことができればと切に思う。

被虐待児と関わる大人達は、その心理的メカニズムの基盤（前回記述）を共通に認識した上で、しかも繰り返し確認し合い、連携しながら、個々の感性と判断力で対応していく意識が必要である。被虐待児の内面でどのようなことが想起されて目の前の行動が起こっているのかを理解しようとする姿勢を持つことで、初めて関係が形成され始める。被虐待児の体得してきた人間関係は、人間同士は支配する側・される側が前提である。そのため治療者側は“意識”していないと、子どもの“試し行動”に振り回され、追体験を重ねさせる結果となる。過去とは違った新しい関係性を体得できるような、枠組みと受容の兼ね合いの中で、支持的アプローチを忍耐強く積み重ねる必要がある。そのようにして歪んだ自己・対人イメージが少しずつ修正される。

### 【保護された被虐待児の心理的・行動の変容】

1. 警戒の段階(おびえと恐怖)
  2. 試しの段階(リミット・テストング)
  3. 甘えの段階(退行現象)
  4. 虐待体験の再現(無意識に繰り返す追体験)
- 1~4を何度も繰り返す。その際に大人側が、目の前の子どもが今どの段階にあるのかを意識することで、試し行動に振り回されないようにすることが重要である。

### 【治療の流れ】

- 安全感安心感の再学習
- 保護膜の再形成
- 人間関係の修正
- 感情コントロールの形成
- 自己イメージ・他者イメージの修正
- 問題行動の理解と修正

### 【今後の課題 - 虐待者側へのアプローチ】

虐待のおよそ6割は、子どもと同様、決して強い立場ではない母親によってなされている。虐待者自らが援助を求める例のほとんどが母親であることを考えれば、援助を求める虐待者に対しては、全く別の呼び方や支援システムがあってもいいのではないかとさえ思えてくる。それこそ、悲惨な虐待を防ぐ最も効率的な援助方法かもしれない。

子どもを虐待する人（以下、便宜的に虐待側と記す）は自らも虐待を受けて育った人が多いといわれている。同時にこれは避けられないことだとは思う。ただ、この場合、虐待側の話には丁寧に耳を傾け、そのストーリーを受け止めるが、そのまま受け入れることはしない。虐待が連鎖の中にあり自分がその中の鎖の一つだとする理解は確か